

# いわむろのみらい

現代GP「いわむろのみらい」創生プロジェクト

# 11

最終プレゼンの旅（各チームのプレゼンテーション、総評）◇ 2

女将が語る岩室の姿（石崎純子さん、岡崎紀さん、後藤初恵さん、高島典子さん、武藤諭美さん）◇ 10

芸妓として生きる◇ 12

メディアデザインチームからの提案◇ 12

## 最終プレゼンの旅

～ほっとするまち いわむろ～

12月17日

- ◆ 各チームのプレゼンテーション
- ◆ 総評



# 最終。プレゼンの旅

「ほっとするまち いわむろ」

光の環境計画チーム

## ほっとする光を未来へ繋げるために

9月に行った光のイベントを経て、今回は2008年から2030年までの事業計画を提示した。計画は3段階に分けられており、岩室の光をどのように作っていくかがわかる計画となっている。第1ステップは2008年から2010年。観光スポットになり得る霊雁の湯での施工を中心に据える。すぐに取り掛かることのできる提灯作りを地域に浸透させ、宿泊施設などを通じて観光客に持つってもらう流れをつくっていく。第2ステップは2010年から2015年。温泉街のメインストリートの改善で、バイパスが完成していることを前提にする計画となる。メインストリート



の道路をアスファルトから石畳に変え、新しい街路灯と行灯を設置していく。第3ステップは2015年から2030年。昔、綺麗だったという下の堤の水質改善と光のアートの導入で、観光スポットとしていく計画だ。池の生態系を改善し、今よりも池を有機的な形へと変えていく。その上で下の堤のライトアップをすることで、岩室の魅力をもた1つ増やしていく。これらの計画は9月から11月にかけての現地での実験・考察

を経て立てられたものだが、問題点もある。実験で使った提灯は重く、雨に弱いものだった。底板を薄くして軽量化し、シェード部分の和紙を厚くして水に強いビニール系素材を使う案が出されている。また、提灯は旅館ごとに特色のあるものを用いたいという意見も出た。提灯をもって霊雁の湯に足を運んでもらうのだが、神聖さのアピール不足が指摘された。霊雁の湯のストーリー作りをして、観光スポットとしての魅力づくりが必要になる。行灯を設置していく際には、既存の街路灯との兼ね合いがある。既存の街路灯をメインに使い、夕暮れ時から観光客の人通りの多い時

間だけ、行灯に切り替える案が出された。行灯を使用する場合、電線などは地中に埋めたりするなど目に触れないような景観づくりが求められるそうだ。



実験としてライトアップした様子



30年後の下の堤の予定図





ン不足がある  
と考える、起こ  
したので今  
回の御神燈プ  
ロジェクトで

## 残し、継続する大切さ

ワークシヨップ計画チーム

今回の主な活動として、昔、地域で行われていた御神燈作りを復活させたワークシヨップチーム。プレゼンでは、彼らが御神燈作りを通して伝えたかったこととその成果、今後の岩室が掲げるべき目標とその具体案を発表した。彼らが岩室に感じた問題とは、皆、自分たちの街に無頓着で、岩室のよさを語れない人が多く、そのため、祭りなどのイベントがいまいち盛り上がりつついないということだ。そうした現状から、根本に立場や世代間のコミュニケーション



総合学習の発表会に地元の方々が訪れた

あった。彼らは「今回の活動が、継続的な交流に繋がられたか」と「岩室の新たな魅力を発見出来たか」を評価基準に挙げ、自己評価した。まず前者では、後日、中学生が行った総合学習の発表会では、ワークシヨップに参加した方々が訪れたことが交流の第一歩だとした。後者につ

いては、今回の「祭」についての語り合いが、自分たちの地域に対して考えるきっかけとなったことから、これからも若者に直接伝えていくことが重要であると言及した。今回の活動が良しとされたこともあり、更なる発展のため、ワークシヨップ継続の提案がされた。

しかし、それは今回行ったものとは全く違う。彼らが掲げたのは、地域住民企画のワークシヨップの実現。その理由は、ムサビがいなくなったら無くなってしまふのでは意味がない、ということが1つ。もう1つは、企画段階から話し合いを行うこと自体にもコミュニケーションのチャンスがあるという



ことだ。また、その完成作品を観光複合施設に置く案も出された。そうすることで、作る意欲を湧かせると同時に、外部の人との交流にも一役買うという効果も合わせ持つ。1つのワークシヨップに二重三重のチャンスを生かせることで、交流の輪を大きくするのが狙いだ。

チームは最終的に、今後の道しるべとして岩室の将来の目標を「岩室らしさを見つける」と定め、それに則ったかたちで、今回の経験でノウハウのある御神燈作り以外にも、ほたる祭りの俳句・灯籠作りや以前行われた岩室甚句など、様々な可能性を提示し、ワークシヨップの継続を強く訴えた。



地場産品チーム

## 商品化を目指して

試作品が出揃い、まさにコンセプト通りプレゼンの「華」となった地場産品チーム。手に取って触ることのできる作品は、インパクトがあり多くの方の目に留まったようだ。特に、実際に設置を検討して頂いている旅館関係の方々は厳しい目を光らせていた。その分、求められるレベルは高く、多くの意見・質問が飛び交い、会場は程よい緊張感と熱気に包まれていた。

例えば脱衣カゴや風呂場に置く座椅子の場合、掃除・整理などの際に邪魔にならないように重ねられる機能（スタッキング）が欲しいなど、現場の感じるこ



とへの配慮が指摘され、なるほどと納得させられ、そういった部分への意識の低さを反省するかたちとなった。また、前回のプレゼンで話題になった花器では、指摘通り、加湿効果の付加を試みたが、大型でなければならぬことや岩室の土を利用出来なくなることから残念ながら諦めざるを得なかったり、水に浮かぶ酒器では器を焼く過程で中に含む空気量が変化してしまうというアクシデントに見舞われたりと、失敗の経験から学ぶことが多かったようだ。

そんな厳しい会場の中で、脚光を浴びていたのは、染織（テキスタイル）の分野である。注目を集めたのはメインである浴衣ではなく、浴衣で使われている6種類の柄を利用した手拭いであつた。手拭いの手軽さと岩

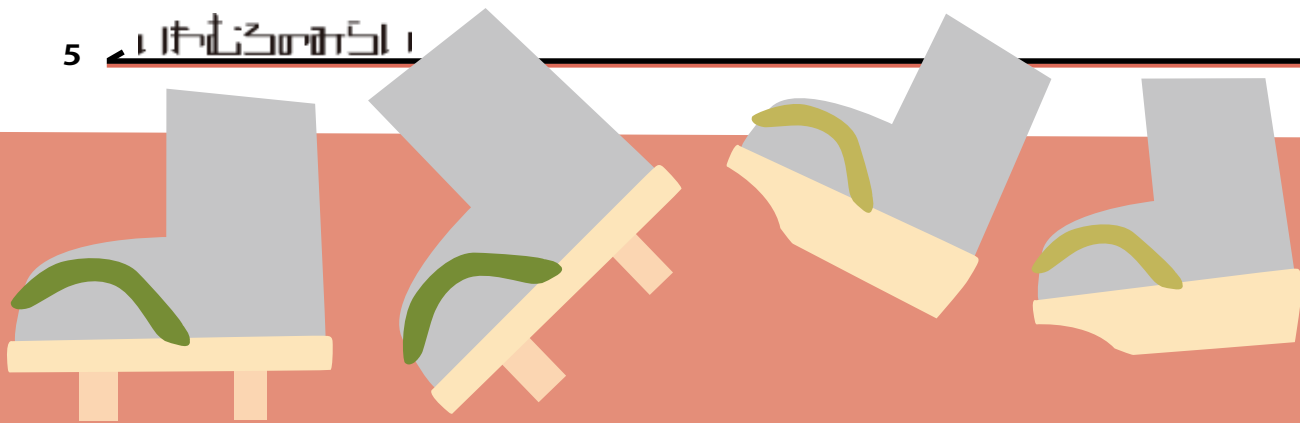


スタッキングが問題となった脱衣カゴ

室をイメージした個性的なデザインが1つになり、生活の中のワンポイントとして暖かい雰囲気を出す作品となっていた。また、作品の質以外にも、手拭いは以前岩室にて販売され商品として成功した、とい

う経緯があるため、地元の方にも少し安心感があったことも好印象を与えた理由だと言えるかもしれない。確かに、見慣れない、聞き慣れないものに何処か抵抗感を感じる気持ちもよくわかる。しかし、リスクを冒してでも新しいことにチャレンジしていかないと、なかなか次のステージには進めない。消極的にならず、次の一步を踏み出す勇気が今岩室に求められているのではないだろうか。





サウンドデザインチーム

## MY GETAを履いて町中へ

「人々が音を聴く機会」や「音から何かを感じ、考えるきっかけ」をつくることをコンセプトに岩室で音に関する調査・分析をし、「からころマップ」と下駄で温泉街を歩く、新しくも懐かしいスタイルを提案した。

岩室の方からの聴き取り調査からは、人と人との交わりから生まれる「にぎわい」がなくなってきたことをメンバーは実感。岩室温泉街を象徴していた芸妓さんが奏でる三味線や下駄の音が廃れてしまっていた。

岩室全体の音を調べるために行ったサウンドリスニングでは、名物と呼べる特色ある音は拾えなかったものの、虫の鳴く声や木々の揺れる音がそこかしこから聴こえてくる。開発の影響を受けず、自然が残されている



ることが、岩室にとって大切な財産であると考えた。

そこで岩室の方々が音に対していかなければならないことは、保存と再生だという。



音を保存することと自然を残すことは同じ。人の生

み出す音も、温泉街にふさわしい音となるように音の再生を図っていく必要があると考えたのだ。

「からころマップ」を提案したのは、音の保存と再生を地元の方だけではなく、観光客にも楽しみながら参加してもらうため。「からころマップ」には

岩室の音名所をピックアップしたものや地図で一覧できる。地図に記してある音を実際に聴いてもらい、音からインスピレーションを受けて、音俳句を詠んで楽しんでもらう工夫がされている。

また、観光客が自発的に外出できるような仕組みも考えられている。「からころマップ」に付けられたクーポンを加盟店に提示するサービスが受けられるというものだ。



より気軽に各所へ足を運んでもらうきっかけになるシステムである。「からころクーポン」は各ホテルや旅館に下駄とセットで設置してもらう。下駄はお米を模ったデザインの「MY GETA (米下駄)」。最終的には岩室の杉を使って地元の方が造ることを目指す。音から岩室の環境を感じ、良い音風景を未来に繋げていくための提案となった。

## 岩室温泉

いわむろおんせん

Iwamuro Onsen



えるシンブルなデザインが選ばれ、微調整した後、今回のものが提案された。また、マークとロゴタイプは事務用品にも展開していく予定で、例として名刺と便箋

マークは「霊雁の湯」と「温泉で繋がる人と人」の2つの案を使うという提案になった。しかし岩室温泉街の象徴とするならば、本来は1つであることが望ましい。そこでアンケートで一番人気だった「霊雁の湯」を岩室温泉街のマークに決定。「温泉で繋がる人と人」のiマークは人が集う観光複合施設で使うことが相応しいだろうという方

向で進んでいる。iは良寛の柔らかな字体に合わせ、角を取った丸みのあるものに修正した。当初、雁はリアルで繊細な線が多かったため、サイズを小さくした時に線が活きず、視認しづらいことが課題だった。改良した結果、簡略化し、開放的に飛躍していくイメージを持たせることができた。

ロゴタイプは100年後も使える

## 1から景観作りを

マークロゴ・サイン計画チーム



道の計画チームのガイドラインに従った図



現在の状態

道の計画チーム

## 岩室を歩道から変えていく

岩室温泉街全体の

景観を整えていくために活動してきた道の計画チーム。最終プレゼンでは、道および景観のガイドラインを提案するかたちとなった。

まず、岩室が抱えている問題点を明らかにするため、温泉街のメインストリートと脇の開きのように取った写真を並べて整理していった。芸妓文化や温泉宿、神社仏閣といった和の趣に合う場所と、そうでない場所の分類をした後、これらの情報を元に、岩室温泉街の景観に関するガイドラインを作った。

メインストリートは道路だけでなく、商店や住宅などの正面デザインに規定を設けることが必要だと提案がした。道路は表面素材を石畳に統一。建物は道路の素材あるいは似せたものを用いることが好ましいよ



うだ。現在、歩道が狭い上に車の速度が速いため、歩行ににくい。観光客に温泉街を堪能してもらうためには、せめて車は一方通行にするなどの措置が必要になることを指摘した。岩室全体としては、電柱や電線を地中に埋めていくことで、岩室の澄んだ空、山や田んぼの景色が見渡せるようになり、自然に抱かれる岩室をアピールできると提案。

岩室温泉の新しいものとしての形として提案されたのが「街角広場」。簡易休憩所、足湯の設置、案内板・インフォメーションを温泉街の各所に点在させる。

矢川に関しては、当初水質のことに焦点が当てられ





上／サインに対するアンケートを実地 下／地図の提案

が披露された。  
サイン計画は住民の方が暮らしやすく、観光客が迷わず安全に目的地まで誘導できるサインを目標して調査を繰り返してきた。今回は岩室温泉街の景観づくりの一環として、標識と地図の提案をした。車のための標識はアイマークカメラを用いて調査。その結果、視線の流れは道

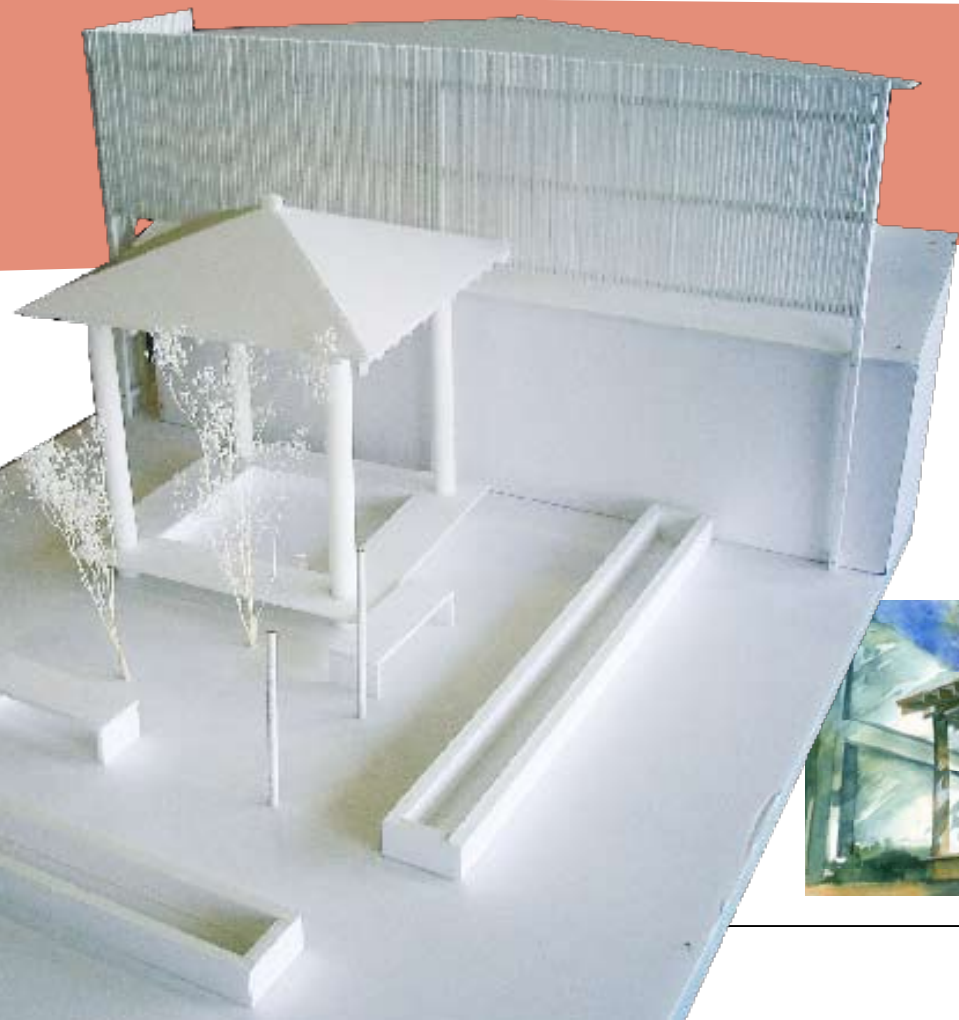
の分岐点に集中し、高さ2メートル以上の標識は認識されにくいことがわかった。そのため岩室に存在している標識の多くが、その機能を果たしていないという結果が出たのだ。また機能を果たしていても良い景観づくりの妨げになっているものも多い。新たに標識を設置する

場合、既存のものを取り外し、必要最低限置くことが望ましいだろう。  
住民の方と行った調査の結果、高さが低く、表示が大きいものが好まれ、風格のあるものが選ばれた。結果を元に制作した3点は、図の通り。ピクトグラムは切り絵風にしたり、和の趣がある。また、標識と配布される地図には同一のピクトグラムを使うことで統一感を出している。



ていたが、見方を変えて矢川の景観について考えることにした。現在、川の片側だけの歩道を両側に設け、植栽を施していく。例えば桜の木を植えることで、お花見を楽しめるスポットにすることも考えられる。矢川を取り囲む景色を改善していくことで、矢川そのものの見方を変えていく。結

果的に水質を良くするため動き、下水道の整備事業への働きかけにもなる可能性もある。まず出来るところから着実に手を入れていく必要があるだろう。



コアチーム

# 成果物の連携が課題

2010年から始動する観光複合施設の実施計画について、具体的な運営展開の一部を示したコアチーム。

観光複合施設の仮名称を「よりなれや」とした。地元の方々には自分たちの家のように親しんでもらう場としての「よりなれ家」。観光客には岩室の特産物や魅力を見てもらう場として

「よりなれ屋」。そして寄つてらっしゃい、見てらっしゃいという新潟県の方言としての「よ

りなれや」。このように「よりなれや」にはこの3つの意味が込められている。

「よりなれや」のロゴは良寛の残した字体を元に制作。岩室のテーマカラーは、お米やお酒、湯煙からヒントを得て「白」に設定した。

スタッフが着用する制服のコンセプトは、「ホッとする空間づくりに基づいた、ホッと元気の制服」。「よりなれや」には店と家という意味を込めている。



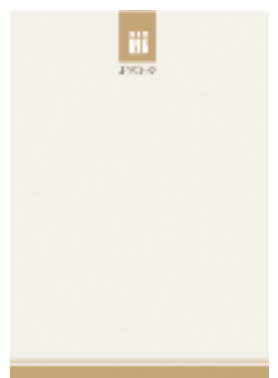
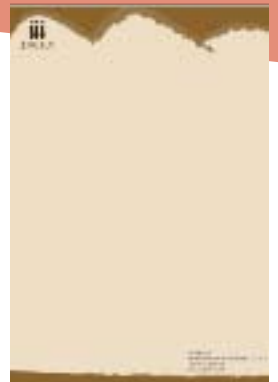
それに合わせて作務衣を選んだという。作務衣は働く人たちの服であり、家庭着でもあり、寛ぎともてなしを提供する。制服に入れたマークはサイン計画チームが提案したiマークを入れている。作務衣の色は温かみのある濃い茶色。エプロンと三角巾は24節季カラーから展開していく案も出た。

ただ費用の面を考えると現実的ではない。そこでエプロンに付ける帯の色を24色で展開して

いくことも提案された。

土産品を入れるために使われるショッピングバッグはシンプルな白と茶の2色を基調に展開。バッグには24節季カラーに合わせて展開するタグを付ける。バッグの色はタグの染える色を選んでいく。包装紙は岩室の特産物をもとにしたデザインや、良寛の詠んだ句を配置したものも試作した。

施設内で使われることになる事務用品として、名刺とレターヘッドも出された。山と越後平野に囲まれた岩室を表現したシンプルなデザインになっている。サイン計画チームが制作したマークとロゴを使ったものも提示。色は春夏秋冬で分けて4色使用。名刺はレターヘッドと同様のデザインになっている。紙は和紙のような触感のものを選んだ。





## コア

- ・レターヘッドを売り物にしてはどうでしょうか。
- ・大人っぽさをおすのか、かわいらしさをおすのか、絞ってもいいと思います。
- ・大量につくる際のコストが心配。
- ・看板は外に置くものなので、耐久性を考えて。
- ・24 節季カラーは岩室の何から反映されている色なのかが分かりにくい。

## 最終プレゼン 総評

最終プレゼンに参加していただいた  
方々から意見・感想を頂きました！

## ワークショップ計画

- ・これから先もずっと実際に続けていくことが大事だと思います。
- ・岩室温泉祭「御神燈」への提案、参考になりました。ありがとうございます。是非実行！！
- ・神燈、より具体的提案いただき感謝！
- ・チームとしては計画が終わりましたが、ワークショップを岩室に根付かせることが大切ですね。

## 光の環境計画

- ・お客さんに提灯、すぐやりたいと思います。
- ・岩室神社のライトアップもお願い！
- ・運営事情が気になりました。
- ・提案に住民の声が全く入ってないように思えた。
- ・提灯の案と道の計画チームの休憩場所はもっと連携すれば良いと思う。
- ・おみやげ屋とか屋台などもできてくるといいね。

## サウンドデザイン

- ・音の提案を観光複合施設の中に活かすことができないものかと。
- ・地元の小中学生とサウンドリスニングとして環境教育と結びつけた展開も考えられるのでは？
- ・お客さんは体験できるもの好きだと思うので、旅館の方との連携がうまくいけば…
- ・観光客を散策に導く新しい手段だと思います。

## 地場産品

- ・着物の柄、よくばり。清潔感が欲しい。
- ・一つの柄にしたほうが綺麗。7つの柄の浴衣をそれぞれの旅館のアイデンティティに！
- ・脱衣籠、ユニークで良い。コスト面で…
- ・もっと練り上げ、めざせ製品化！
- ・浴室用の椅子、お風呂場で実際に使うとき少し怖いと思いました。

## 道の計画

- ・メイン道路を石畳に！
- ・石畳と乳母車や車椅子などの通行について、また、雨や雪の日でも石畳は歩きやすいのか？
- ・どこに行っても足湯なので、違った湯の使い方はないかな。
- ・地中に電線を埋めるのは素敵。
- ・一方通行には問題もあります。

## サイン計画

- ・情報の更新に対するシステム提案があるとよい。
- ・看板や地図は景観にも関わってくる問題なので、他のチームとの連携が重要なのは。
- ・デザイン決定だけでなく、使い方のガイドラインを提案してほしいです。
- ・地図に名前をつけるといいと思います。
- ・地図はどうしても見にくいと感じた。

女将さんに聞きました！

訪

女将が語る

岩室の生活

逢

## 松葉屋の女将



後藤初恵さん  
女将歴 16年

白の板前服を身に着け  
素早い足取りで登場した  
のは後藤初恵さん。他の  
女将とは一味違う雰囲気  
を持つ後藤さんに、日常  
について伺いました。

普段、私は板前をやっています。毎日、仕込みをする日々です。たった今も、今日のお昼にお客様へ出そうと思っている玉子丼を作ってきました。

板前になったのは、女将になった後のことです。松葉屋の女将になって、中で手伝いをしていうちに、料理も作るようになりました。実際に板前業を本職とするようになったのは、女将になって4年経ってから。旅館を手伝いながら、この宿の中で板前修業をしました。

松葉屋にいらっしゃるお客様は、今と昔とさほど変わっていないと思います。月によっても違いますが、11月初頭のこの時期であれば、菊祭を見にいらっしゃる県内の老人会の方になります。忘年会シーズンも地元の方が中心。県外のお客様がいらっしゃるのは、ゴールデンウィークや年末年始、あとは夏の海の時期になります。他の時期は、常連のお客様ですね。女将をやっていて良かったと思う瞬間

## 松屋の女将



岡崎紀さん  
女将歴 約50年

懐かしく、家庭的な趣  
が漂う松屋。約50年、  
岩室で過ごしてきた大女  
将の岡崎紀さんに、昔と  
今の岩室について、お話  
していただきました。

うちは小さい宿ですが、その分、お客様と深くコミュニケーションをとることが出来ます。お付き合いの長い方ですと、20年や30年と続く方もいらっしゃいます。親戚のような関係を築くことができ、親しんでいただける、というところを松屋では大事にしていきたい、と思っています。

私は長岡から岩室の方へ嫁いできて、女将として働くことになりました。当時は今のように自動でやってくれるような機器はありませんので、お風呂を焚いたりしていました。温泉の温度はたしか25度前後でしたので、どこのお宿でもやってらしたと思います。朝は5時頃から支度を始めていました。お仕事は毎日でしたが、月に2日お休みをもらって、子ども3人を育てつつ、若い頃は過ごしていました。今はすっかり女将業を引退しておりまして、10年程前からは、本を読むなどして自分の時間を楽しませて

間は、お客様から「ありがとう」と言われることです。忙しい合間を縫ってやっていることは、子どものミニバスケットの試合を見に行くことです。趣味、とはまた違いますが、楽しみにしています。子どもたちは、上から中3、中2、小6、小4の4人になりますが、もう面倒は掛かりません。  
4人の母であり、宿の顔でもあり、また板前としても腕を揮う松葉屋の女将。快活なその人柄がとても印象的な方でした。

## 綿屋の女将



石崎純子さん  
女将歴 21年

終始、落ち着いた物腰  
でお話して下さった石  
崎純子さん。綿屋の雰  
囲気も女将に似てゆっ  
たりとした時間が流れ  
ていました。

私は旧新潟市の生まれで、女将になる前はOLをしておりました。父が岩室の生まれだったものから、よく遊びに来て、間瀬の海でも泳ぎました。懐かしく、すんなり溶け込んだ気が致します。

岩室で私が一番好きなのは春です。

蛙が鳴き始める頃、水を張った田植え前の田んぼに、山が鏡のように映って、夜は月も映り込みます。この光景をお客様にもお見せしたいな、と思いますね。蛙の合唱は心の中も潤おすような気がします。4月の中旬から下旬です。

続けていることといえば、綿屋では毎朝、蛙を召し上がっていたりしております。今、蛙は当たり前のようにいただけますが、塩引き蛙は新潟県の名産でもありますので。美



味しい鮭を召し上がっていただきたくて、村上から取り寄せております。

地域によってお正月の迎え方は違うんですね。私は31日にご馳走を食べて年を越すのが当たり前だと思っていました。子どもの頃は、大晦日の食卓に塩引き鮭が在るか無いかで、その年の家の状態がわかりました。塩引き鮭を食べられることが一つの喜びでした。厚く切った新巻鮭で一年の労苦を労う意味もあったかと思えます。綿屋でも31日にご馳走を振舞うという風習は残しておりまして、31日から正月まで特別メニューです。

私たちがお客様に寛いでいただき癒さなければならぬ立場なのに、お客様の方から逆に激励や、温かいお言葉をいただいて、おがましくも使命感をおぼえ、頑張らなくてはと思います。そういう時、この仕事をやっていて良かったな、と感じます。

最近ストレスを溜めないために、好きなことを何か一つ、1日10分でもいいからしています。精神安定剤みたいなものですよね。

## 富士屋の女将



武藤諭美さん  
女将歴 16年

颯爽と軽やかな所作で  
お宿の現状を語って  
下さった、武藤諭美さん。  
若女将の明るさ  
一同、パワーを貰って  
きました。

町並みは変わりませんが、女将になった頃に比べ、芸妓さんの入るお座敷の数が少なくなりました。また、団体や接待でいらっしゃる方が減りました。富士屋では一昨年、クラブをエステに変え、二次会社は地元・外來のお客様も入りやすいように改装いたしました。館内をリニューアルし、新しい客層の取り入れにも努力しているところです。

キーワードは「個」だと思います。好きな人としか旅行しなくなったな、と。以前は、団体で来られた場合、知らない方と相部屋で5、6人の方と泊まる時代でした。けれども今は団体でお見えになっても、ごく親しい方、またご夫婦でのお部屋割りがほとんどです。団体だけ個、といえますか。さらにお一人おひとりを大切にしたいおもてなしが必要です。

女将業を通じ、いろんな方と会えることは財産です。嫁いだ頃は7対3で県外、特に東京や埼玉の方が圧倒的に多かったです。それが少しずつ逆転し、今は4対6で県内からのお客様が多くなりました。

地震がありますと交通が寸断され、来たくても来られなくなりま。やはり地元の方に愛されなければ、と思えます。中越地震後、やっと落ち着き始めたところで、また、ですから。お客様も建物も無事で何よりでしたが、風評被害は暫く続きました。

女将の会でも情報交換をしたり、女将の会主催イベントを開催したりしております。今はやはり宿それぞれ頑張ることももちろん大事ですが、地域と私たちが一丸となって「岩室温泉」をアピール出来れば良いですね。

## ゆもとやの女将



高島典子さん  
女将歴 40年

女将として多くの責任を背負う中でも、揺らぐことのない女性としての強さを感じたのが、高島典子さん。女将のお仕事について伺いました。

本来は高島屋大女将が女将会の会長でしたが、病気で倒れられてから私が代理をさせていただいております。

女将の会が発足して15年。皆さんお忙しいので集まりは不定期ですが、年に何回かは集まっています話合っています。

おります。女将会の最大のプロジェクトは「岩室女将と昼祭」毎年300人迄のお客様にお越しただいております。

生活時間はお客様に合わせるの。様々ですね。お客様がゴルフに行かれるときは6時半過ぎから朝食をとれるように5時半には働いていたりします。旅館というのは隠れたところに大きな仕事がたくさんありますので、表は若女将にまかせて、私は裏方を主に担当しております。

毎日の段取りがあるので、家にいながら丸1日休むということはありません。休憩中も電話はありますが、誤解してほしくないのは、それが決して苦痛ではないということ。ゆもとやがあつての私なんです。きつとそれはどこの女将さんもそうでしょう。

プロジェクトについては、残念ですが女将会までは伝わっておらず、事後報告だけというのが現状です。斬新な企画だけれど、ともすると独りよがりになってはいないかと不安も感じます。せつかくおもしろいことをしているのに、内輪で終わってしまったのはもったいないので、もっと外に向かってPRしていただきたいです。

これは個人の意見ですけども、もっと岩室全体を巻き込んで、何日かけて行ったらいいのではないのでしょうか。例えば、もともとある行事に組み込んだりして、今後に繋がる流れを作ってもらいたいですね。何日かイベントがあつたらお客様も楽しいし、泊まっていたら岩室の良さをもっとわかってもらえらると思います。女将会も呼んでいただければもちろんすぐ協力しますよ。

岩室温泉街の女将会には13軒のお宿が参加しています。それぞれのお宿が独自にもてなしの力持ちを持っています。岩室の人やモノ、自然と繋がっていました。そして岩室の魅力を外へ発信していくために、女将会として纏まっているところが強みになっています。是非この輪を岩室全体に広げて欲しいです。

## 芸妓として生きる



10月31日に行われた親睦会の席で、芸妓さん4人を招き、ほてる大橋の会場で公開インタビューを実施。芸妓さんから次々に繰り出される赤裸々なお話に、会場は笑いの渦で湧き立っていました。芸妓になろうと思ったきっかけ話や、今と昔の芸妓を取り巻く環境の違いなど。もちろん芸妓のお仕事そのものに纏わるお話も伺ってきました。

小梅さん（以下はK） 私は着物の仕立てをやってまして、それで芸妓のお仕事に興味がありました。

富士柳さん（以下はH） はじめは隣の巻町にいました。着物を着るのが好きだったから。でも最初の3年くらいは不定休でつらかったです。

テツ子さん（以下はT） 友人が仕事をしていたのがきっかけです。昭和48年くらいで、景気は良くてね。芸歴は36年になります。

リカさん（以下はR） 子ども二人抱えて、芸妓をやっていました。でも仕事をしてきたおかげで、得たものもありますよ。恋愛はたくさんしました。来たお客さんに惚れるのが芸妓の本当の接待だと思っています。

K お披露目は10代後半の時。おおらかに育ててもらって、好きなようにできました。当時は男性のお客様だけでしたが、最近はお客様も。

H 私の居たところには5人の芸妓がいました。住み込みで、お給料に違いはありましたが、仲は良かった。

R 私のところは若い人の中で派閥があって、7人で争ってま

した。

K 座敷用の着物は季節ごとに10枚前後。大島紬とかだと100万単位します。けれど忙しい時は月に100万くらいお給料いただいていた。着物は付下げが主流でした。

H 昔は実家が近くて、親には冷たい目で見られていました。

T 私は両親が理解してくれていたのが良かった。

H でも今は家族と楽しくお付き合いしていますよ。

K 芸妓をやっていて良かったことは、いろんな人と会えて、経験が増えたことです。

R 普通では会えないような方にも会えたことですね。

H 毎日お客様は違いますから、本当に多くの方と会える仕事です。

T いろんな方と会って、度胸がつきましたね。

## メディアデザインチームからの提案

メディアデザインチームでは最終報告で、新しい媒体案を出した。地域メディア発行の目的は、地元住民が自分の暮らす町のことを周知し、地域活動への参加を促すことにある。岩室の課題として挙げられたのは組織の横の繋がりが薄いこと。今後は地域内の連帯感を高めていくことが必要になる。組織の繋がりを強くすることは、最終的に観光客へのアピールになる。

地域メディアは地域内の情報収集と共有を可能にする。連携を組むことができれば、岩室地域全体として一致団結したメッセージを外へ発信することができ

読者は岩室地域で暮らす方々、全員。情報発信地となる観光複合施設のスタッフの方や地元住民の方々が制作することで、より充実した内容のメディアになると考えている。



発行日 2008年2月5日  
発行元 「いわむろのみらい」創生プロジェクト  
メディアデザインチーム  
編集長：西村奈都子  
副編集長：濱祐斗  
デザイナー：濱祐斗  
ライター：河内奈緒、西村奈都子、濱祐斗  
連絡先 〒187-8505 東京都小平市小川町1-736  
武蔵野美術大学 研究支援センター  
Tel&Fax 042-342-7263  
URL <http://www.musabi.ac.jp/iwamuro/>  
©「いわむろのみらい」創生プロジェクト  
現代GP「いわむろのみらい」創生プロジェクト